こゝやの光

本尊の巻

題辭

みすがたのうらに

餘韻

起信論……一
無量壽尊光明歎德文要解……六

大聖釋尊の曰く、阿彌陀佛眞金色の身、圓光徹照し端正無比なるを想念して心眼の前に在け。

聖善導曰く、行者等一切の時處晝夜に常に此想を作せ、行住坐臥にも亦此想を作せと。

聖文殊普賢の曰く、面たり彼の佛阿彌陀を見上り卽ち安樂刹に往生することを得ん。

聖龍樹曰く、面善は圓淨にして滿月の如く、威光は猶し千の日月の如し、聲は天鼓俱支羅の如し、故に我は彌陀尊を頂禮す。

聖善導曰く、彌陀身心は法界に遍く、衆生心想の中に影現す、乃至依心起想して眞容を表せよ。

又曰く念佛して念々見佛の想を作せよ。

聖源信詠じて、眠れば夢、覺れば現、束の間も、忘れ難きは、彌陀の面影。

聖法然詠じて、我は唯、何日か佛に葵草、心の妻に繋ぬ日ぞなき。

先聖既にかくの如し我ら佛の嬰兒として御親の慈悲の面影を憶ふ許り樂きはなし。

起信論

（2）筆記　（註――親筆無し）

本論二――法（とは法體）
　　義とを以て本體論如來論を說明す。卽ち體相用と分ちて云ふなり。

本體とは宇宙萬有多樣なりと雖も、二大種に還元す。（表示上は樣々であるけれども大本は二である。）物と心となり。

本體に

唯物論――本と云へば唯物である。

唯心論――天地萬物は一つの精神である。見分相分とあつて種々

の觀念が只心に見へるだけにて心を離れては何にもない。精神一つ實在するばかり。

唯理論—精神でも物質でもない。本を云へば一つの理なり。

本論は物と心とを超越したる眞如の理を以て、本體とす。超越したる理なれども物と心との何れに見ると云へば、理は心なりとす。唯識の心と心眞如とは同じからず。眞如の理も心眞如で、やはり眞如の理である。眞如は如何なるものなりやといふに、精神の如きものである。

玄談の中

本論の本體は唯理論なるも理は凝然澹泊なる非活物にあらず寂靜堪然なるものなり。故に本體の理は精神體の様なものなり。本體は人に知と能とある如く、屬性なかるべからず。然らざれば宇宙萬有の生活々動の原理を説明すること能はざればなり。

本體に二面

一心二門
- 心眞如門—不變不動
- 心生滅門—隨緣顯動

心生滅門
- 染—染分は無明に由つて生死流轉
- 淨—淨分は報應二身を現じて衆生を度す卽ち寂めたる心

宗教が常住の安立は前者に求め、不斷顯動は後者による。

無明による一夢心

一本覺—衆生本覺眞心。喩二富貴人一

二不覺—迷眞不能實知二見眞如理。富貴人初眠如し

三念起—不覺故に心動。三細如夢。—○個人—一つの念起故に見起て、境を見る

四見起—念起故有二能見相一。如二夢中想一。—我も彼もなし故に見も活も精神もない一體なり。

五境現—以有見故現根身器界。夢中別身在二他鄉一。貧苦する如し。

六執法—一切の境は心より生することを知らず實に法ありと執す。

七執我—法定を執するが故に自他の殊を見る自を計つて我と執す。

八煩惱—執二四大一爲二我身一。故貪愛三毒を起す。

九造業—由二三毒擊鼓一。故造二善惡業一。

十受報—業成如響。六道生死の苦を受く。

淨緣に因つて眞に還る

一 頓悟—悟前一—本覺の心を離れて迷ひの心なし、迷ひの心を離れて本覺の心なし、故に本覺より迷ひ、本覺心より悟る、卽ち本覺一なりと見る

本覺—爲第一重

二 怖心—發心解行—起信といふ大乘のことを聞いて初めて怖る心生ず

發心—喚起—喚び起されて初めて目がさめる

三、修行—六波羅密の行—行五度覺妄心前念惡覺め後念起さず

四、開發—信成就發三心

五、我空—離我執無自他別

六、法空—法無自性故本來空如二夢幻一。緣によつて表はるるものに執着するから迷ふ

七、色自在—已證境是自心所現。定意力を以て得二自在一

八、心自在—不見外有定實之境無不遍

九、離念—滿足方便一念相應覺心初起離微細心念心常住

盡迷源入究竟覺。れたみ廢立は我空法空の時離るゝ、けれどもまだ微細の心は殘るが今は其れも盡して究竟に入る

十、成佛始本不二本來平等同一覺眞淨心源應用無碍常住法界感而通名二大覺一。

無量壽尊光明歎德文要解

（註――明治三十五年一月二十六日淨土教報第四百七十一號附錄。聖經會印施）

佛陀の世に出現し給ふは一大事因緣を顯示して生死解脫の大道を衆生に與へんが爲なり。一大事因緣とは彌陀の恩寵を緣とし衆生の信仰を因と爲す感應の功力に依て衆生の佛智見を開き佛陀の正道に入らしむるもの是れなり、牟尼出世の本懷寔に此に有り。今歎德文を解釋して此旨を明にせんが爲に節を分つ事下の如し。

第壹節　客體なる彌陀の德

彌陀の名―彌陀の性德―彌陀の光用。

（一）彌陀の名―阿彌陀とは無量の義なり、則ち經に『彼の佛の光明無量にして十方の國を照すに障碍する所なし故に號て阿彌陀とす』又『彼の佛の壽命及び其人民無量無邊阿僧祇劫なり故に阿彌陀と名く』とあるを以て知るべし。經文は光明と壽命の二德を擧げて其名を示すと雖も實には彌陀に備る所の功德測るべからざるを以て阿彌陀と名け奉る。

（二）彌陀の性德―此文の初に『無量壽佛の威神光明は最尊第一たり』とあるは彌陀に體、相、用、三大の德を具へて法界の衆生を攝護する最上の實在者なる事を示す。其體德とは彌陀の本體は無相の故に一切處に周遍して實在ざる處なく、無始無終にして變易る事なし。是諸佛の本地、萬法の淵源なり故に之を名けて法身と爲す。而して文に威神とあるは相大の勢力を示す。彌陀の實體は元と無色無相なれども無相は相として相ならざるは無し、彌陀は衆生を救拯はんが爲に塵沙の相好を顯現し、其德たる玄妙不可思議にして無上の智慧、無盡の慈悲、無限の威力を有てり。謂はゆる法界一切の萬有は彌陀の大圓鏡智の裏に炳現するが故に無限の慈悲を以て一切の衆生を哀愍攝取して捨てず無限の威力を以て一切の有情を救拯に能はざるなきなり又彌陀は常

住、安樂、自在、清淨、德として具備らざるなく常に至眞至美至善なる靈界最高の處に儼臨し無量の靈德を以て莊嚴す、故に之を名けて報身と稱へ奉る。亦た次ぎの文に光明とあるは彌陀の作用を示す。光明とは彌陀が完全圓滿なる靈德を以て衆生を攝取して自性の如くに同化せんとし給ふ恩寵に名くるなり『彌陀は此靈德より無量の刹土に八相を示現して衆生を愛せざるは無く亦た衆生心の中に感應して之を化せざるは無し、故に之を名けて應身と呼び奉る。此の如く廣大無邊なるを以て彌陀の性德や得て說べからず然も衆生に信芽薰發の爲に言を假て其德を彰表す即ち十二光佛の御名是なり。『無量光』全智の德。十方法界の依正事理として知らざる無く見ざる無し又衆生の起す無量の過患を除きて無量の聖德を成さしむ。「無邊光」遍在の德　空間として實在せざる無く無限にして光被せざるなし又虛空法界及び衆生の煩惱業等無邊の故に攝化の光明も亦た無邊なり。「無礙光」全能の德、謂く無上の威力を有てるが故に事として能はざるなし、又衆生の我法二執を除て無礙自在ならしむ。「無對光」絕對の德　無等々光を用て衆生の無明を破り無上覺を證らしむ。「炎王光」無上の慈悲、無限の威力をもて衆生の五逆十惡等の障を燒き盡すこと大火炎の塵埃を消滅せしむるに似たり。「清淨光」清淨の德衆生の感覺に被る六塵の垢汚を除き六根を清淨となす。「歡喜光」至美の德　衆生の感情に觸て歡天喜地心神悅豫を與へて不可思議なり。「智慧光」至眞の德　衆生の智力に被る。此光衆生の無明を照破し佛智見を開示す。「不斷光」至善の德　是れ意志に被る。衆生に於ける主我の意象を轉じて聖靈の菩提心と成し無上覺に至るまで退轉せざらしむ。「難思光」超思慮の德　自然に不可思議の業種々の用甚深にして作意に超絕せり又衆生の凡を轉じて聖となす豈夫れ思議すべけんや。「無稱光」超言說の德　言說の及ぶ所にあらず、言語は偏にして眞理は圓かなればなり。「超日月光」超天然の德　日光は世の闇を破りて萬物を長養す、彌陀の光明は衆生精神の無明を照らし聖德を增長せしむ故に日月に超へたり。上の如き諸の德光衆生に接觸して如何なる利益を與るやは次の文に明かなり。

（三）彌陀の光用『其れ衆生有てより亦た復た是の如し』に至るの一節は彌陀光明の用を示す。先づ初に過ふ者三句は彌陀の恩惠が人の心を攝取同化する功用を擧ぐるなり。衆生の信心が彌陀の恩寵と感合する時は貪り瞋り迷ひなる三垢の煩惱は亡ぶ。卽ち至眞の光は人の惑を破りて正智見を開き、至美の德は感情を柔らげて平和の喜を與へ、至善の德は意志を矯めて正義の道を行はしむ又之を佛人感合の境と名くべし、謂く人の心機この境に入るや情慾去り感覺盡き意志斷ゆる所恍然として我は亡びて不可思議光と致一すれば卽ち八面玲瓏歡天喜地の妙境心神融溶の狀態言語の及ぶ所にあらず。次に「善心生ず」とは一たび信機開發したる後は彌陀の觀念を意志の指導と賴みて行動を爲し道德的行爲を實現んとする意志なるが故に善心と名つく。「光明顯赫」等の四句は信機開發したる者の光明を讃歎する事を示す。抑も彌陀の恩寵無限にして光被せざる處なきも彌陀三昧の心機開展者に非れば之を認識する能はず、敎主釋尊及ひ諸の聖者は既に覺眼開けしを以て彌陀の靈光を知見す。此れに依りその不可思議の德を歎稱して止まざるなり。實に彌陀の光明は遍く法界に滿つれ共、衆生の心機未だ開展けざれば彼神光と感合し靈化の恩光を被むるに由なし、若しこの恩寵を得んと欲せば須らく信心の開發を祈るべし。

第貳節　主體なる衆生の信仰

信機の開展—更生—結勸

（一）信機の開展『若し衆生有て』の六句は信機の開展を明かす。先づ「威神功德」を聞くとは信仰の素因なり。前の如き彌陀の性德を聞きて後一心に念佛し專ら彌陀欣慕の一念に凝神し一切の忘想忘念を排きて至心に斷ゆる事無く行住座臥念々不捨に彌陀を念すれば或は頓速に或は漸次に純熟し、一旦豁然として彌陀の心光に感合する事を得べし、人この靈驗を感得たる後は天然的精神の生活を超越して彌陀の新生命に入る。爰に至れば有爲の穢身は轉化ざれども神識は無爲の聖域に栖み遊ふ。此如く意象

を轉化したるを往生或は更生と云。既に此意地に安立する人の精神は世間の毀譽八風の爲に動かされずして志氣常に寂靜なり之を人の完全せる道德的生活と爲す又重ねて信を得たる人の心華の形容を陳べは之を仰げは彌々高く之を鑽は彌々かたし。假令へ空間は測るべくも此人の心は量るべからず。いかにとなれば彌陀大智慧の光明に由て至眞の眼を開き、無比の美德を感じ心地を莊嚴し聖靈の德に化して意志自ら至高善となる故に眞如海中絕生佛之假名、平等性中無自他之形相、三千經卷自ら開け恒沙功德不覺に圓備す。その麗しきは分陀利花に超へその馥ばしきは噉蔔華に勝れたり。信心開發して彌陀の光明と融合せる境也。世間何にものか此れに比べて稱說すべけんや。

（二）更生『其國に生ずる事を得て』の下は信仰の結果なり、「其國」とは極樂無爲泥洹の聖域を指す、「生」とは更生なり。是に色蘊と心蘊の二種あり、從來の天然的精神生活を超越して彌陀靈化の生活に入るは心蘊の更生なり。次にこの依身を脫けて正しく報土に入るは色蘊の更生となす。假令へ有餘依の身は變らざれども更生したる心機には信華開きて常に聖靈の光を有せり。然る後ち此身を蟬脫するの時來れば神識は忽ちに無爲の聖域に入る。彼ここに到れば其德、形色に現れ、虛無無極の體、神通智悲、菩薩無量の德行を具備し普賢の行願に住し、生死の林、煩惱の園に遊んで普く法界の衆生を度す乃至成佛の曉には阿彌陀如來の如く十方の諸佛に稱讃せらるゝに至るなり問ふ衆生作佛せば何故に然るや、曰く、此人は彌陀の菩提心、彌陀の聖種、彌陀の規範の下に行動し彌陀に同化せらる。因既に然り果何ぞ然らざらん。故に佛道を成就したる上は彌陀如來の如く未來遠々劫を盡して十方の衆生を度す。因果既に斯の如くなるが故に聖衆その德を嘆稱して止まざるなり。

三。結勸　仰ぎ願くば諸の行者等、我等罪惡生死の凡夫、この機制の束縛に係つて自ら解脫する事能はざる生物なり。無邊法界の中なる一惑星に生を受け泡の如くに生れ沫の如くに沒す。今より一心彌陀に歸命し同く無量壽と成り無量光となり未來際を盡して普く法界の衆生を度せん。信念空しからずんば大願大行悉く彌陀とならん。

○「信機未開の肉の生活」は、無明闇黒裡に迷沒す、佛陀の照鑑をかへりみず、五欲を貪り常に飢渴す、動物的生活、外界の惡に誘惑せられ、我痴、我見、我慢、我愛、四顚倒、魔の眷屬、鐵また瑛の如し、無量の煩惱と過患を產す、

○「信心開發したる靈の生活」は盡十方無礙光の中に安住す、如來照鑑の下に慚愧衣を着、法喜禪悅の食をうく、人生最完全圓滿の生活、眞善美の德光に靈化せられ、大圓覺に歸入して我なし、常住安樂自在清淨、聖者の伴侶、純金また珠玉の如し、無邊の聖德と靈福を生ず、

讃佛偈

（蘇東坡居士）

佛大圓覺を以て十方界に充滿す　我顚倒の想を以て生死の中に出沒す　如何か一念を以て淨土に往生するを得ん　無始の業を作り　一念既に餘りあり　已に一念より生じ　還て一念より滅す　生滅々盡の處　便ち我佛と同し　水を海中に投するが如く　風中に燈を吹するが如し　大聖智ありと雖も亦分別すること能はず　願くは我に先きだちし父母　及び一切衆生　在處を西方と爲し　所遇皆な極樂ならん　人々無量壽にして去も無く亦來るも無けん

昭和八年四月二十五日　印刷
昭和八年四月二十八日　發行
（誌代年壹圓）
編輯兼發行人　山崎辨成　小石川區關口町六十五番地
印刷人　小林七太郎　小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所　電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番